

外来語使用における言語外的要因の分析 —書き言葉コーパスの利用可能性—

久屋 愛実（オックスフォード大学院 言語学博士課程）[†]

Analysis of Language External Effects on the Use of Loanwords: The Potential of Written Corpus-based Studies

Aimi Kuya (Faculty of Linguistics, Philology and Phonetics, University of Oxford)

0. はじめに

現代日本語において、和語や漢語からなる類義の既存語（以下、単に「既存語」）があるのにもかかわらず頻繁に利用され定着している外来語は数多くある。本稿では、外来語を既存語の社会言語学的語彙変異形とみなし、「ケース」を事例として、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(2011)（以下、BCCWJ）においてその使用に影響すると思われる言語外的要因を調査し、記述することを試みる。以下では、まず本研究の目的を簡単に述べ（第1節）、外来語を語彙のバリエーションとして研究するための手法を概観したうえで（第2節）、BCCWJにおける「ケース」の使用について、書き手の生年代、性別、媒体、スタイルの4要因をとりあげ、その影響を検証する（第3節）。

1. 本研究の目的

外来語の研究においては、語彙調査などの定量的調査がすすむにつれて、日本語における外来語使用が全体としてどう変化してきたかという量的概観が可能になった。こうした研究は、日本語における語種としての外来語の全体像を、いわばマクロにとらえる試みであった。しかし、茂木(2012)が指摘するように、現代日本語で定着を見せている基本的外来語の意味・文法的研究、いわばミクロなレベルでの研究は、まだ不十分なようである。こうした流れを汲み、金(2011)は、20世紀後半の新聞コーパスで増加している外来語は類義の既存語をもつ抽象名詞¹に多いことを指摘した。金はさらにその中で「基本語化²」したいいくつかの外来語の例を挙げ、それらの語が既存語の存在にも関わらずなぜ基本語化するに至ったのかを、意味・用法の側面から通時的に分析している³。

金(2011)の研究は、外来語の基本語化を類義語と対照しながら言語内的に説明することが目的であったのだが、本稿では金では言及されなかった外来語使用の言語外的要因について記述する。そのために、ひとつのアプローチとして、外来語を既存語の社会言語学的語

[†] aimi.kuya@ling-phil.ox.ac.uk

¹ この中で、金は日本語で増加している外来語名詞には「具体名詞」と「抽象名詞」の2つのタイプがあり、前者が近代化などの理由で外国語から借用され日本語における使用が増えた語群（「テレビ」「ホテル」など）であるのに対し、後者は和語や漢語の類義語があるにもかかわらず生じた語群（「タイプ」「トラブル」「ケース」など）であることを指摘している。これは Myers-Scotton(2006)がいうところの、“Cultural borrowing”と“Core borrowing”という借用語の概念区分とほぼ一致すると思われる。前者は受け入れ言語側の既存語彙では言い表すことができないような事物や概念を表現するために借用され、科学や技術の分野でその多くの例を見ることができる。それに対して、後者は受け入れ言語側の語彙に類似の表現が存在するにもかかわらず、借用されるものである。本稿でも、日本語におけるこうした外来語のタイプの違いを認識したうえで、後者、つまり既存語をもつ外来語に焦点を当てて調査することを前提としている。

² 金によれば、「基本語化」とは、当該語彙の周辺部から中心部へと移行して基本語彙（一定の言語使用域において広範囲・高頻度に用いられる語彙）へと仲間入りすることである。

³ 金は既存語をもつ2つの外来語「トラブル」と「ケース」を挙げ、類義語の意味・用法とも比較しながら、両者が新聞における基本語としての地位をどのように確立していったのかを詳細に記述している。

彙変異形 (lexical variant) として扱い、外来語の生起率と社会的属性、媒体、スタイルとの関係を「ケース」を事例として見ていく。語彙のバリエーションとしての外来語と、社会属性との関係に注目した研究としては、外来語に対する意識調査研究がある(田中(2007))。そこでは「キャンセル/解約/取り消し」と「ハッピー/幸福/幸せ」を事例として、この中でどの表現を使いたいか聞かれており、外来語を使いたいという意識は年齢層により段階的な差があることが例証された。本稿ではコーパスを用いて、実際の言語使用においてこうした属性差を観察することができるかどうか、さらに調査を行う。これにより、先行研究とあわせてより幅広い視野で外来語を捉えることが可能になると思われる。

2. 方法論

2. 1. 語彙のバリエーションとその一変異形としての外来語

本稿では外来語を、和語や漢語からなる既存語の社会言語学的語彙変異形とみなすのだが、語彙を社会言語学的バリエーションとして扱うことの難しさは、意味というものが介在してくるところにある。そもそも、あるものをバリエーションとして扱うことができるのは、変異形の間で交替が起こっても意味の変化が生じないという条件を満たす場合であり、そのもっとも良い例は音韻交替⁴である (Labov(1972))。一方、語彙交替の場合は、意味の変化が生じないような環境を特定することは容易ではない。なぜなら、それぞれの語が異なる用法や文脈においてもつ意味合い、ニュアンス、語感などが微妙に異なることは往々にしてあるからである。この問題の解決策として、Lavandera(1978)は、「意味的な等価性 (semantic equivalence)」を厳密な意味で適用する代わりに、「機能的等価性 (functional equivalence)」を条件として変異形の交替環境を定めることを提案している。この概念に基づけば、辞書的な類義性をベースとして、それぞれの類義語が文で同じような機能を果たす場合に、それらを変異形と認めてよいことになる。

語彙のバリエーション研究は、以上のような理由からバリエーション研究の枠組みの中ではあまり手がかかされていないが、Ito and Tagliamonte (2003)による英語における程度副詞 (intensifier) のバリエーション研究など、少しずつ研究実績が増えてきている。本稿でも、機能的等価性を手掛かりとして、外来語を語彙変異形として扱うことを試みる。なお「ケース」とその既存語がもつ機能的等価性をどう特定するかは、2. 4で詳しく述べる。

2. 2. BCCWJ

本稿ではコーパスとしてBCCWJを用いる。BCCWJは、異なる観点から設計された3つのサブコーパスから構成され、データ量が全体で1億語に上る大規模コーパスである(山崎、他(2012))。出版サブコーパスには書籍、雑誌、新聞が、図書館サブコーパスには書籍が、そして特定目的サブコーパスには白書、国会議事録、教科書、「Yahoo!知恵袋」や「Yahoo!ブログ」などのインターネット上に投稿された書き言葉が含まれ、様々な媒体から抽出された現代日本語書き言葉データにより構成されている。

今回は分析対象としてこの中の出版サブコーパスを利用する。出版サブコーパスは、2001年から2005年までのあいだに国内で出版された書籍・雑誌・新聞を母集団とし、そこからランダムにサンプリングされたデータおよそ3,600万語(短単位)からなるコーパスである。このうち、書籍は2,954万語、雑誌は569万語、新聞は88万語のデータからなる(山崎、他(2012))。のちのち媒体差を分析することを考え、書籍と雑誌に比べて極端に規模の小さい新聞データは分析の対象外とした。また、データには固定長と可変長があるが、今回はなるべくたくさんのデータから調べるために分量の多い可変長データを利用した。書籍と雑誌の可変長データの合計は、およそ3,500万語相当となる(山崎、他(2012))。

本稿でBCCWJ出版サブコーパスを採用した理由は、1) 他の語種より基本的に出現頻度が低い外来語でも、定量的調査に耐えうるサンプル量を抽出できる規模を有すること、2)

⁴ 例えば、*fourth floor* は、[r]音が発音されてもされなくても、意味の変化が起こることはない。

社会言語学的調査に必要となる書き手の社会的属性情報が、一定量のサンプルから取り出し可能であること、3) 多様な媒体からの書き言葉データを含み、媒体間の比較が可能であることの3点に集約できる。

2. 3. 分析対象語

本稿では、金(2011)の研究と関連付けるために、やはり事例として「ケース」を選択した。これに加え、「ケース」を選択したのは、外来語の中では定量的調査に耐えうるような高頻度語であるという点、また、性別や媒体の影響を見るという目的に照らして、特定の性別や分野に偏った使用が見られないような一般的な語であるという点で、この語が本研究の目的に合致すると考えられるからである。

「ケース」に関しては、金(2011)の事例研究においてその類義語の詳細な選定が行われており、今回はそこで選ばれた「場合」「例」「事例」の3語を類義語として採用した。つまり、「ケース」とこれらの既存語は「特定の環境において交替しうる語彙変異形である」とみなす。この「特定の環境」については、次で詳しく述べる。

2. 4. 分析対象となる環境

2. 1で述べたとおり、「ケース/場合/例/事例」の4語を社会言語学的変異形として扱うためにはこれらが機能的等価性を保つような環境を特定することが不可欠である。以下、「ケース」と既存語との交替を可能にする環境はどのような環境であるかを定義する。

金(2011)は、「ケース」がいわゆる「コト」に代表される形式名詞的な用法をもつことを指摘し、その中でも、叙述文が表現する内容を客観的な事柄として名詞化する「客観的同格連体名詞」としての用法を手がかりに、これら4語の類義関係を認めている。そこで、本稿ではまず、4語が機能的等価性をもつのは、文中で形式名詞として「ある内容を客観的事柄として名詞化する」とき、と定義する。これにより、金のいう「場合」の「仮定条件」的用法(1)や「提題」的用法(2)、「例」の単なる「例示」的用法(3)、各語に特有な慣用的用法(4)は排除される(下記の例はいずれも金(2011)から引用)。

- (1) 賃上げが難しい場合は雇用延長など別のテーマで交渉する“選択”の時代になったと問題提起している。
- (2) アサガオの場合、～
- (3) 例として、～/～を例に挙げ、～
- (4) 場合によっては/そんなこと言ってる場合かつ/例の悪名高い作家/例によって無言で打つ

形式名詞はふつう修飾語をとるが、金によれば、これら4語は「コト」よりもやや具体性のある名詞であるため、とくに修飾語をとらなくてもよいという。これら4語がとりうる形式は4つあり、修飾部をとらず単独で(5)、合成語の構成要素として(6)、名詞句における被修飾語として(7)、連体修飾節構造における被修飾語として(8)文中に現れる(下記の例は金(2011)から「ケース」の用例を代表として引用)。

- (5) しかし、女性の平均賃金は男性より低いため、男女の賠償額にケースによっては100万円近い差が生じている。
- (6) ケース1、テストケース、レアケース、重症ケース、脳死・虐待ケース
- (7) いじめなどのケース、マドンナさんのケース、京都市のケース、今回のようなケース、4件のケース、悪質なケース、初めてのケース、似たケース、いろんなケース
- (8) a. ネット先進国の米国でも、ネット関連企業は苦戦するケースが少なくない。
b. ～(略)まず母親に『癒(いや)し』が必要なケースも多い」と話す。
c. ～(略)しつけの域を超えて繰り返される暴力・ネグレクトが原因のケースに絞っ

て調べた。

以上の例文を見ると、金の指摘する通り、「ケース／場合／例／事例」は、連体修飾語や連体修飾部を伴わない単独用法や、「ケース1」のように合成語における接頭辞としても文中に現れている。ただし、金によれば、4つの形式のうち、20世紀後半の新聞コーパスにおいて「ケース」が最も多く出現するのは、連体修飾節構造（233/327例）においてであり、名詞句構造（74/327例）がそれに続くという。以上のことを踏まえて、本稿では「ケース」およびその既存語が、形式名詞として「ある内容を客観的事柄として名詞化」し、さらに名詞句または連体修飾節構造において出現しているものを分析対象とした。

ただし、この定義でも、何格が接続するか、述語は何をとるかなど、語彙によって表現上のばらつきがある可能性がある。そこで、コロケーションという観点からも4語の等価性を高めるために、後続する格と述語の種類をさらに絞った。金は、連体修飾節構造において「ケース」が多少・有無・生起・増減・想定・報告・限定・異同・規定・関与・比較の意味をもつ述語表現と結びつくことを指摘した。金の用例整理を参考にすると、これらのほとんどはガ格と結びつく述語であるため、分析対象に含める述語はガ格をとともなう多少・有無・生起・増減・想定・報告の意味をもつもの⁵に限定した。つまり(8c)のように二格などを伴う例は、分析対象とならない。ただし、ガ格は(8b)のようにハ格やモ格でも現れうるため、それら2つの格が後続する場合も含めた。これで、(9)のように、機能・構造(形式)・コロケーションの3つの側面からコントロールされた語彙交替環境が特定できた。

(9) 分析対象となる語彙交替環境のモデル

- a. 機能：形式名詞として「ある内容を客観的事柄として名詞化する」とき
- b. 構造(形式)：名詞句または連体修飾節
- c. コロケーション：{ケース／場合／例／事例} + {ガ／ハ／モ格}
+ {多少／有無／生起／増減／想定／報告の意味をもつ述語}

2. 5. サンプルの抽出

ここまでできたところで、分析対象となるサンプルを抽出していく。手順としては、まずBCCWJ出版サブコーパスの書籍・雑誌から、「ケース」、「場合」、「例」、「事例」の4語を含むサンプルをすべて抽出した。そこから、(9)で特定した環境で出現しているもの以外を排除した。その結果、条件にあてはまるサンプルは、「ケース」544件、既存語2036件（「場合」1447件、「例」461件、「事例」128件）の合計2580件であった。

表1：形式の違いと「ケース／既存語」の生起率

		ケース	既存語	合計
名詞句	度数	46	242	288
	%	16.0%	84.0%	100.0%
連体修飾節	度数	498	1794	2292
	%	21.7%	78.3%	100.0%
合計	度数	544	2036	2580
	%	21.1%	78.9%	100.0%

⁵ 具体例の一部を以下に挙げる（金(2011)より引用）。

多少（多い・少ない・ほとんどだ・珍しい）、増減（増える・減る）、有無（ある・ない・見られる・認められない）、生起（起きる）、想定（想定される・考えられる・予想される）、報告（挙げられる・紹介される・報じられる）など。

表 1 では、抽出した計 2580 件のサンプルを形式ごとに区分している。「ケース」の出現度数は名詞句 (46 件) よりも連体修飾節 (498 件) において圧倒的に多く、生起率 (%) で見ても名詞句 (16.0%) よりも連体修飾節 (21.7%) において高くなっている。これにより、既存語全体と比べると「ケース」が名詞句よりも連体修飾節構造で多く使用されていることがわかる。

図 1 は、表 1 における既存語 3 語を区別し、それぞれの生起率を「ケース」の生起率と合わせてグラフ化したものである。ここで注意したいのは、既存語それぞれの出現傾向が形式によって異なるということである。図 1 から、「場合」が名詞句構造よりも連体修飾節構造において生起率が高いのと対照的に、「例」と「事例」は連体修飾節構造よりも名詞句構造において生起率が高いことが読み取れる。このように、形式によるそれぞれの語彙の生起率の違いがみられる以上、両形式を混ぜて分析することはよくないと判断し、今回は全体のサンプル数が圧倒的に多く (2292/2580 件)、かつ「ケース」の出現率がより高い連体修飾節構造に限定してさらに詳細な分析を進めていく。

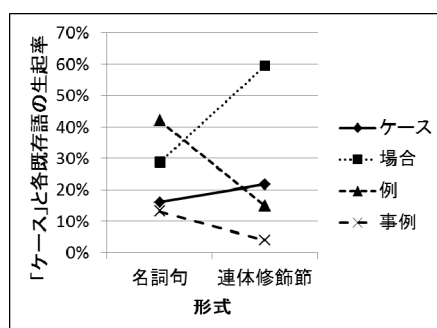


図 1：形式の違いと「ケース／場合／例／事例」の生起率

3. 要因ごとの分析結果

本節では、外来語「ケース」の出現に影響を与える言語外的要因を選び、要因ごとにクロス表を用いた分析を行う。なお、本稿の目的は外来語が出現する要因を検証することなので、以下、分析をしやすいするために「場合・例・事例」3語をまとめて「既存語」とし、「ケース」対「既存語」という単純な 2 項対立で見えていく。

3. 1. 書き手の生年と言語変化

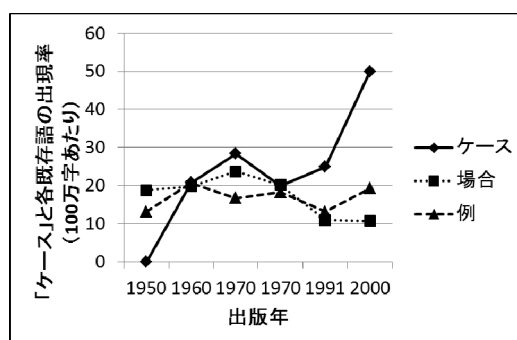


図 2：新聞における「ケース／場合／例」の出現率 (100 万字あたり、連体修飾節構造のみ)
(データ元：金(2011))⁶

⁶ グラフは筆者によるもの。金(2011)第 6 章の [表 8] 連体修飾節構造の出現率(p.112)のデータをもとにグラフにした。金は「事例」の用例数が少ないという理由から、年ごとの出現率を出していないため、「事例」はこのグラフでも省かれている。

金(2011)は、20世紀後半の新聞における「ケース」の出現率（100万字あたり）が、特に連体修飾節用法において大きく増加していることを通事的に示した（図2）。この増加が起こった理由のひとつとして、既存語から「ケース」への言葉の使用の変化（言語変化）が起こっている可能性が挙げられる。だとすれば、「ケース」の生起率に、生年による差が存在するのではないか、という予測がたつ。

以上をふまえて、BCCWJ出版コーパスの書籍と雑誌（2001-2005年出版）を使い、外来語「ケース」の生起率を書き手の生年という観点から整理し、見かけ上の変化（change in apparent time）が認められるかを検証する。BCCWJにおける生年情報は、1930年代、1940年代など10年刻みで公表されており、それを利用して生年代が最も早いグループ（～1939）、中間のグループ（1940-1959）、そして最も遅いグループ（1960-1979）の3つに区分した。

表2：生年代の違いと「ケース／既存語」の生起率

		ケース	既存語	合計
～1939	度数	105	458	563
	%	18.7%	81.3%	100.0%
1940-1959	度数	259	946	1205
	%	21.5%	78.5%	100.0%
1960-1979	度数	134	390	524
	%	25.6%	74.4%	100.0%
合計	度数	498	1794	2292
	%	21.7%	78.3%	100.0%

$X^2=7.729, d.f.=2, p<0.05$

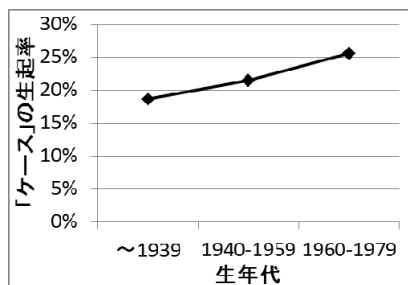


図3：生年代の違いと「ケース」の生起率

表2は「ケース」と既存語の度数と生起率を、3つの生年代区分ごとに表している。図3は「ケース」の生起率のみをグラフ化したものである。図3を見ると、書き手の生年代が上がるにつれて「ケース」の生起率が次第に上昇している。つまり、生年が上がる（世代が若くなる）につれて、既存語群に替わって外来語がより用いられていることがわかる。これにより、「ケース」の見かけ上の言語変化が認められ、図2で見た、金(2011)における「ケース」の出現率の増加が言語変化とかがかわっていることが予測できる。

ちなみに、表2でカイ2乗検定をかけると有為差が認められた⁷。このことは、若い人ほど「ケース」をより使う、ということを示すものではない。しかし、少なくとも「ケース」と既存語の生起率には生年代間により差があることが統計的に認められ、図3も参照して総合的に判断すると、特に若い年代が生起率を上げていることが「ケース」の出現率の上昇に影響を与えていると思われる。

⁷ 検定には SPSS ver. 20 を使用した。

3. 2. 書き手の性別

バリエーション研究において、女性のほうが変化をリードする、ということがよく言われる。これを今回の調査語である「ケース」にあてはめると、女性のほうが外来語をより使うことが予測される⁸。そこでまず、書き手の性別という観点から「ケース」の生起率を見ていく。表3から、「ケース」の生起率が男性（21.6%）よりも女性グループ（23.0%）において若干高いことが読み取れるものの、これは統計的に有意な差ではなかった。これで、外来語「ケース」の生起率において性差は認められないことがわかった。

表3：性別の違いと「ケース/既存語」の生起率

		ケース	既存語	合計
男	度数	446	1620	2066
	%	21.6%	78.4%	100.0%
女	度数	52	174	226
	%	23.0%	77.0%	100.0%
合計	度数	498	1794	2292
	%	21.7%	78.3%	100.0%

$X^2=0.242, d.f.=1$

3. 3. 媒体差

次に、媒体間で「ケース」の生起率に差があるかについて検討する。表4、図4から、「ケース」の生起率は書籍（20.6%）よりも雑誌（38.3%）において上昇していることがわかり、これはカイ2乗検定により有意であった。

表4：媒体の違いと「ケース/既存語」の生起率

		ケース	既存語	合計
書籍	度数	444	1707	2151
	%	20.6%	79.4%	100.0%
雑誌	度数	54	87	141
	%	38.3%	61.7%	100.0%
合計	度数	498	1794	2292
	%	21.7%	78.3%	100.0%

$X^2=24.256, d.f.=1, p<0.001$

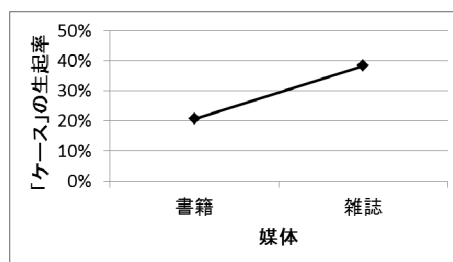


図4：媒体の違いと「ケース」の生起率

では、なぜ媒体間で差が出たのだろうか。そもそも新聞・雑誌の媒体としての違いはどこにあるのだろうか。考えられる可能性は以下の2つである。第1に、各媒体の特徴とし

⁸ 外来語のなかには、ファッションや美容、スポーツ関連語など、特定の性別のみが使うことの多い特徴的な語彙もある。しかし、本研究では、こうした影響を避けるため、ニュートラルな語を選んだ。

て、スタイル（改まり度）の違いが影響している可能性がある。しかしながら、両媒体とも広いジャンルを網羅する媒体であるため、媒体とスタイルを直結させるのは難しい。よって、たとえば書籍なら専門書か一般書か、雑誌なら専門誌か一般誌かなど、スタイルの異なる種類のものがどのような割合で含まれているのか詳細に調査して、媒体種と改まり度との関連を考察する必要がある。

第2に、媒体そのものの特徴が影響している可能性も考えられる。書籍と違い、雑誌は短期間で売り上げを伸ばすために、すぐに読者の目をひくような個性的・魅力的な存在である必要がある。また、常に新しい情報を提供していくという特徴があるため、目新しさという側面も持ち合わせていなければならない。こういった特徴のために、雑誌という媒体は、「スタイリッシュな・おしゃれな・かっこいい・斬新な・目新しい」というようなイメージと結びつきやすいと思われる。一方、梁(2012)によれば、日本語における外来語という語種のもつプラスイメージとして一番多かったものは、「かっこいい」すなわち「洗練されている」という評価だったという。ここで今一度、雑誌において外来語の生起率が高い理由を考えるならば、雑誌という媒体のもつ「スタイリッシュさ」というプラスイメージが、同じく「かっこよさ」というプラスイメージをもつ外来語によって体現しやすいため、と考えることができまいだろうか。

最後に、媒体間でのサンプルサイズに大きな違いがあることも考慮する必要がある。書籍コーパスからのサンプルが2151件であるのに対し、雑誌コーパスからのサンプル数は141件しかない。そのため、雑誌においては少しの度数の差でも全体の割合の差として出やすいという側面もあるのかもしれない。

3. 4. スタイルによる差

最後に、BCCWJの特定目的サブコーパスに含まれる「Yahoo!知恵袋⁹」コーパスを選び、2.5と同じ手順でデータ（ただし、連体修飾節構造に限る）を抽出し、外来語「ケース」の出現率に、スタイルによる差が出るかどうかを調べてみた。「Yahoo!知恵袋」は、インターネット上に投稿された質問に対して、不特定多数の人が回答を書き込むという形でやりとりされる。インターネットにおける書き言葉は、出版されないという点で、出版を前提としている書籍・雑誌よりも改まり度が低いことが予想され、両者にはスタイルの違いがあると考えられる。よって両者を比較することで、スタイルが「ケース」の生起率に影響を与えているかどうかを検証することができる。ちなみに「Yahoo!知恵袋」コーパスのデータは2004年から2005年にインターネット上に投稿されたもので、出版コーパスを構成する出版物の出版年(2001-2005)と同時期であり、両者はよい比較対象になると思われる。

表5：スタイルの違いと「ケース/既存語」の生起率

		ケース	既存語	合計
出版	度数	498	1794	2292
	%	21.7%	78.3%	100.0%
非出版	度数	200	1449	1649
	%	12.1%	87.9%	100.0%
合計	度数	698	3243	3941
	%	17.7%	82.3%	100.0%
$X^2=60.633, d.f.=1, p<0.001$				

⁹ 「Yahoo!知恵袋」コーパスは、ヤフー株式会社から提供された、2004年10月から2005年1月にかけて投稿された3,120,839の質問とそれに対する回答からなるデータがもとになっている。コーパス自体はこのうち抽出された91,450サンプルから構成されており、規模は約1,000万語にのぼる。なお、1サンプルは1つの質問とそれに対するベストアンサーからなる（山崎、他(2012)）。

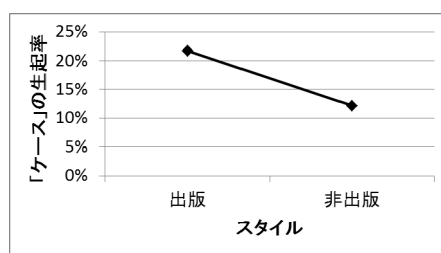


図5：スタイルの違いと「ケース」の生起率

表5、図5から、「ケース」の生起率は非出版物（Yahoo!知恵袋）（12.1%）よりも出版物（書籍・雑誌）（21.7%）において高いことが見てとれ、この差は、カイ2乗検定において有為であった。

ここで、外来語「ケース」の生起率にスタイル差が出たという事実から、外来語「ケース」がもつ、類義語の中での相対的なイメージについて考察してみたい。改まり度が高くなるほど生起率が上昇するという事は、「ケース」という語が、既存語に対してよりフォーマルな変異形として機能しているということの意味している。

ここで、こうした傾向は、既存語をもつ外来語群に一般的に当てはまるものなのか、という疑問がわく。筆者の直観としては、外来語が既存語よりもフォーマルであるかどうかは語彙によって異なる可能性がある。なぜなら、たとえば動詞系外来語「チャレンジする」や形容動詞系外来語「クールな」などは既存語に比べて若干インフォーマルな印象があるからである。ただ「チャレンジする」や「クールな」は「ケース」に比べ定着度が低いことから、語のフォーマルさというものが定着度に関係する可能性もあり、定着度に応じてスタイルとの関係を整理する必要もありそうだ。

4. 考察・まとめ

本稿では、「ケース」を事例として、外来語と既存語の語彙交替に影響を与える言語的要因のうち、BCCWJにおいて取得可能な要因（生年代、性別、媒体差、スタイル差）それぞれに関して検証を行った。これまでの外来語研究においては、外来語の生起率について、社会言語学的観点から調査したものはほとんどなく、あっても意識調査にとどまることが多かった。それは第1に、語彙を社会言語学的変異形として扱うことが難しいという問題と、第2に、外来語という語種の出現頻度が低いために定量的調査に耐えうるだけのデータを収集するのが難しいという問題があったからである。第1の問題は、「機能的等価性」を手がかりに分析対象を細かく限定することで解決を試みた。また第2の問題についても、BCCWJが完成したことで外来語のような低頻度語でも一定量のサンプルを得られるようになった。さらにBCCWJの一部のサンプルには書き手の属性情報（生年代、性別など）もタグ付けされている。これにより、実際の言語資料をもとに、社会的属性を説明変数とした外来語使用についての調査ができるようになった。本研究はその試験的試みである。

本研究での調査の結果、「ケース」の生起率に、生年代の違いと、媒体差（書籍と雑誌）、スタイル差（出版物と非出版物）が影響することがわかった。生年代については、若い世代ほど「ケース」の生起率に上昇が見られたことで、金(2011)が示した20世紀後半の新聞における「ケース」の出現率の急増が、言語変化と関連していることがわかった。また、本稿冒頭で紹介した、田中(2007)の意識調査の結果（外来語使用に対する意識は年齢層により段階的な差がある）は、実際の言語使用にも現れていることがわかった。

性差については、女性の「ケース」生起率が男性よりも若干高かったものの、この差は統計的に有為でないことがわかった。ただし「ケース」は日本語においてかなり定着度の高い語彙である。まだ完全に定着していないような外来語を選択して今後調査をすれば、もしかして性差が認められるものもあるかもしれない。

媒体の違いによる生起率の差については、その差の意味を解釈するために、書籍と雑誌

の媒体差の本質が何であるかをより詳しく特徴づけることが今後の課題となった。そのためには、媒体種とスタイル（改まり度）との関わり、そして「ケース」という語のもつイメージを把握することがひとつの糸口となる可能性がある。

スタイルの違いによる生起率の差については、既存語に対する外来語の相対的なイメージ（または地位）を考察するにあたって重要なポイントとなると思われる。今回は「ケース」が既存語と比べてよりフォーマルな語彙であることがうかがえたが、これは、必ずしも一般化できることではないだろうということが、筆者の今の見解である。それぞれの語のイメージや地位はその語の定着度とも関わりがありそうで、語の定着度も参照しながらスタイルとの関係を考えていく必要があるようだ。

その他、今後の課題としては、外来語使用に影響を与えうる、生年や性別以外の言語外的要因に関しても、可能な限り検証していく必要があるだろう。また、言語外的要因と言語内的要因を合わせて、それぞれの要因の影響度の違いを明らかにすることも重要である。「ケース」とその既存語については、言語内的要因として、それを修飾する節の内容（デキゴト）の「よしあし」や「已然・未然性」（金(2011)）といった意味的分類や、共起する述語の種類（有無・多少など）が一つの指標になると思われる。

いずれにせよ、本研究で得られた傾向が外来語一般に拡張できるのかどうか、「ケース」以外の外来語も調べて事例研究を積み重ねる必要がある。それにより、日本語における外来語の社会言語学的役割の全体像が見えてくるだろう。

謝 辞

本研究で分析したデータは、筆者が2012年11月から2013年2月まで外来研究員として国立国語研究所に滞在していた期間中に、BCCWJから収集したものである。滞在接受入れて頂いた同研究所所長の影山太郎先生、言語資源研究系系長の前川喜久雄先生に感謝申し上げますとともに、受け入れ教官として滞在中様々な面でご指導ご鞭撻いただいた田中牧郎先生には特に感謝の意を表したい。なお、データ抽出の際には、同研究所コーパス開発センターの中村荘範さん（マンパワー・ジャパン株式会社）に協力して頂いた。また、本稿の準備段階で貴重なコメントをして頂いた同研究所研究員の金愛蘭さんと南部智史さんにもこの場を借りてお礼申し上げます。

参考文献

- 金愛蘭(2011)「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」阪大日本語研究 別冊3.
- 田中牧郎(2007)「漢語・和語と比較した外来語に対する意識」『公共媒体の外来語—「外来語」言い換え提案を支える調査研究—』国立国語研究所報告 126、pp.302-310.
- 茂木俊伸(2012)「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析—「カットする」を例として—」『特定領域「日本語コーパス」』平成22年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集、pp.103-110.
- 山崎誠、小椋秀樹、小沼悦、他(2012)「研究活動・成果の総括：データ班 代表性を有する現代日本語書籍コーパスの構築」『特定領域「日本語コーパス」』平成22年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集、pp.149-156.
- 梁敏鎬(2012)「日本語と韓国語の外来語の受容意識—イメージ調査の分析—」、陣内正敬、田中牧郎、相澤正夫編(2012)『外来語研究の新展開』、pp.148-167、おうふう.
- Ito, Rika and Sali Tagliamonte (2003) *Well weird, right dodgy, very strange, really cool: Layering and recycling in English intensifiers. Language in Society*, 32, pp.257-279.
- Labov, William (1972) *Sociolinguistic patterns*. University of Pennsylvania Press.
- Lavandera, Beatriz R. (1978) Where does the sociolinguistic variable stop? *Language in Society*, 7, pp.171-183.
- Meyers-Scotton, Carol. (2006) *Multiple voices: An introduction to bilingualism*. Wiley Blackwell.